

右に似寄候新板之書籍は、當地江伺之上開板承届候様、彼地町奉行江相達候間、於當地も、右之通に可被心得候、此段大坂町奉行江も、孰もより可有通達候、

〔町觸四〕御向様御差圖、戊九〇天保六月廿三日申渡仕候、

申渡

書物問屋行事

寶曆甲戌元曆  
一曆法新書

一同。續。錄。

寛政曆  
一曆法新書

右兩曆書、近年何方々洩出候哉、偶々書物問屋手江も相渡り候趣相聞候、御當地書物問屋共、右曆書持居候は、早々懸り町年寄共江可差出候、若秘置、後日相知候は、急度可申付候、  
一自今以後、貞享曆并右兩曆書之儀は、假令端本たりとも、萬一心得違之者有之、賣物に出候は、買取置、是又早々可差出候、勿論右買取候代料相下グ可遣間、自今急度相心得、不念無之様可致候、  
右之通、從町御奉行所被仰渡候間、急度相心得書物問屋一統不洩様可申繼候、

戌六月

外國曆

〔日本紀略二〕承平七年十月十三日壬辰、同日仰太宰府、應寫進大唐。今年來年曆本、

〔春記〕長曆三年閏十二月廿八日甲寅、關白命云、唐曆一日持來、新羅國以唐曆用之云々、仍去夏密々遣示帥許、今日所持來也、摺本也、而件曆具相叶道平曆也、月大小一分無相違、希有之又希有也、件事只以諸道多同推被定仰也、然而難知真偽、于今鬱々、而件曆已以相叶、是太有興事也、古今無此類、可賞歎、可賞歎、證昭至于今無益、可嘲可嘲者、諸卿響應、又尤可然事也、明日可被奏、此唐曆云々、後聞以經成被奏畢云々、

〔扶桑略記二十九〕永承三年五月二日己亥、自太宰府進新羅曆、與本朝无相違、但十二月大小不同、  
〔年中行事秘抄十一月〕一日